『法華経音辨訛』に見る覚順の読経規範

――見出し語以外の記述を中心に――

劉琦

江戸後期の天台宗僧・覚順によって著された『法華経音辨訛』（一八四四年刊）は、法華経読誦音を取上げた資料である。本書には、初心者が特に誤りやすい読誦音や注意すべき事項についての記述が含まれており、当時の呉音読みの実態や、法華経読誦音の規範を考えるうえで重要な資料といえる。

発表者はこれまで、本書一丁オから八丁オまでの見出し語を対象として、仮名音注、声点および清濁に関する割注を中心に検討してきた。その結果、『法華経音辨訛』は、覚順の師である宗淵が著した『法華経山家本』（一八三五年刊）の読誦音を継承する一方、初心者を対象とした読誦の実践を重視する資料であると結論付けた。一方、八丁ウから二〇丁ウまでの後半部は、前半部とは形式・内容が大きく異なるものの、いまだ十分に検討されていない。

そこで本発表では、『法華経音辨訛』後半部の性格を明らかにするとともに、『法華経音辨訛』がいかなる意図のもとに編纂された資料であるのかを改めて考察したい。

後半部の内容は、「陀羅尼」、宗淵著書からの抜粋、「木魚ニテ讀經スル失」、「讀方ニ習ヒノ有事」、跋文から構成されている。

まず、「陀羅尼」の項目では、陀羅尼は阿闍梨の口授を受けるべきものであり、師伝を受けずに読誦することによって誤りが生じると述べ、相承された正音の読み方を仮名で示している。

次に、宗淵著書からの抜粋について、『法華経音辨訛』と宗淵の『法華経山家本裏書』（一八三五年刊）を対照した結果、覚順は、宗淵著書における語の字形や読み方に関する考証を簡潔に要約し、初学者が利用しやすい形に再整理していることが確認できた。

また、「木魚ニテ讀經スル失」では、木魚を用いた読経と用いない読経の句読を比較し、木魚のリズムに従うことで、本来の意味に即した読み方から離れてしまう例を示している。さらに、諸文献を引用しながら、木魚がもともと食事の時刻を知らせるための器であったことを論じ、木魚を用いた読経を批判している。

「讀方ニ習ヒノ有事」では、同じ文字であっても、声調の違いによって異なる意味を指し得ることを、覚順自身の経験談を通して示している。また、初学者が自らの才力や辞書だけに頼ることを戒め、師に従って読誦法を学ぶべきであると述べている。

最後の跋文には、『法華経音辨訛』の成立に至る経緯が記されており、初学者のために、特に誤りやすい読音を抜き出して仮名を付したという本書の編纂意図が示されている。

以上の調査から、『法華経音辨訛』の後半部には、陀羅尼、宗淵著書からの抜粋、木魚を用いた読経への批判、師伝の重要性など、法華経読誦音に関する多様な記述が含まれていることが明らかとなった。

これらの記述には、師伝による「正音」を重視し、初学者に正しい読誦音を伝えようとする覚順の姿勢が認められる。したがって、本書は、『法華経山家本』の読誦音を継承しつつ、覚順自身の規範意識も反映し、初学者の便宜のために編纂された資料であると考えられる。